研究の栞

日本古建築研究の栞（第二十四回）

工學博士　天沼俊一

第三十　扉（下の三）

（二）半扉（ハンビラ）

此れも亦新しくつけた名である。こゝに半扉といふのは、長さが普通の扉の半分又は其以下で、主として黄檗宗の寺院に用ひられたのである、この半扉の後方には、普通の扉がある（第百五十八・百五十九・百六十圖等參照）から、双方を同じ方向へ開くのでは少しく工合が悪い。そこで當然半扉は外方に、其うしろの扉は内方に開く樣にしてある。出入口の巾が廣い時には、双方共兩折にしてある。其一例として福濟寺青蓮堂（觀音堂）のをとると、本扉は手先が外に折れて（第百五十九圖）、吊元で内に開くのに、半扉の方が手先が同じく外に折れ（第百七十二圖）、次にもう一度外に開く樣になつてゐる。

其吊方は多くの場合蝶番を用ひてあるが、其意匠は頗る平凡、扉其物の美的價値を減殺することは多大である。もう少し何とかしたらよさそうなものだが、なぜこんなにしてあるのか。稀れに上下に藁座を用ひ、軸で回轉するのもあるが、かゝる場合藁座の意匠は中に捨て難いものがある（第百十七

六圖)。これ許りではなく所謂「唐寺」の建築家は、藁座に興味があつたと見え、いろ〳〵の意匠をしてゐるから、中々面白いが、これ等は後に圖示して解説をするつもりである。故にこゝにはすべて略しておく。

此れ等の半扉は小さいものであるが、甚だ面白くできてゐる。宇治よりも大阪よりも、最もよく長崎に適してゐる。異國情調が横溢してゐる。さうしてすべて棧唐戸の種類である。時には金剛柵の樣なのがあつたり、格子の樣な夏向のがあつたりするが、全體としていふと棧唐戸である。併しながらこれは普通の扉と一所にせず、別扱にした方がよさゝうであるし、またさうすべきものと思つたので、こゝでは別にこの題をつけておいたのである。

第百六十四圖より第百七十四圖に至る合計十一葉のこの種の扉によつて、其意匠の分類をしてみると、大凡次の五種類に分つことができるやうである。

第一類。主要の間は一つで、中央に花・果實等(一種の格狹間又は格子もこの中に入れる)をおき、其上下又は四方には透刻・唐草等を充塡したもの。例。萬福寺大雄寶殿・開山堂・崇福寺及聖福寺大雄寶殿(長崎)・聖福寺中門(正面のもの、いい格狹間入)・瑞龍寺(俗に拙)・鐵眼寺、大阪難波所在)大雄寶殿・同開山堂(格子入)等。

第二類。第一類と殆ど同じであるが、主要な間は二つあつて、上の間には連子(其形特殊なり)、下の間には一種の格狹間(其内には透彫・花・又は細かい縱格子等を入れる)又は卍崩を入れ、其他の部分は簡單な彫刻を入れたもの。例。福濟寺大雄寶殿及中門(中門の裏天王殿の扉。所在地長崎)・同青蓮堂・興福寺媽姐堂(長崎所在。媽姐は海の女神。「マソ」と訓む)

第三類。一つの主要なる間を卍崩を以て飾れるもの。例。崇福寺媽姐堂・福濟寺青蓮堂・崇

福寺護法堂。

第四類。一つの主要なる間を意匠をこらした格子を以て飾つたもの。例。崇福寺護法堂。

第五類。金剛柵の樣な甚だ簡單なもの。例。萬福寺天王殿其他。

以下半扉の實例につき簡單に解說をかいておくから、圖と比較して讀むことが必要である。

第一類　實例。

第百六十四圖は原は全部彩色がたあつかも知れぬが、今は剝げてゐてよく判らぬ。中央の間の桃は全體が赤い色になつてゐる。葉は綠の方がいゝのに赤いのは、あとから面倒なので全部同じ色にして了つたのであらう。同寺大雄寶殿の半扉またこれと全く同じであるが、この方は桃の葉が綠色にしてある。大阪難波の鐵眼寺（本名瑞龍寺）にも同じく桃を刻したのがあるが、色はなかつたかと思ふ。長崎聖福寺の大雄寶殿のも亦桃をつけてある。地

を白くぬり、實は赤（？）（初めは赤だつたのが、やけたのであらう。今は大分くすんでゐる）、二枚の葉は綠、脇の小間のうち、左右には唐草をほり込み、花と葉とは桃の實と葉と夫れ〳〵に同彩色で、下の間には透彫がある。框の面は赤である。大分新しいものだが中々きれいである。

第百六十五圖は牡丹の花と葉とが透彫にしてある。當初は彩色がしてあつたらしいが、今はとれてしまつてゐる。牡丹の花瓣の輪廓の線のところがとれたあとをみると、赤い色が殘つてゐるから、ことによつたら最初はこの裏板に、花のところは赤、葉のところに綠色を塗り、後から打ちつけたのではあるまいか。故に出來たてには、花瓣は赤に葉は綠に見えたのであらう。聖福寺觀音堂は寶永元年の建築で、數度の修理を經たといふが（長崎市史）、この半扉がいつのものかは勿論判らない。併し少なくともこの牡丹をほつてある板は、古いとみてよさゝうである。割合によくできてゐる。

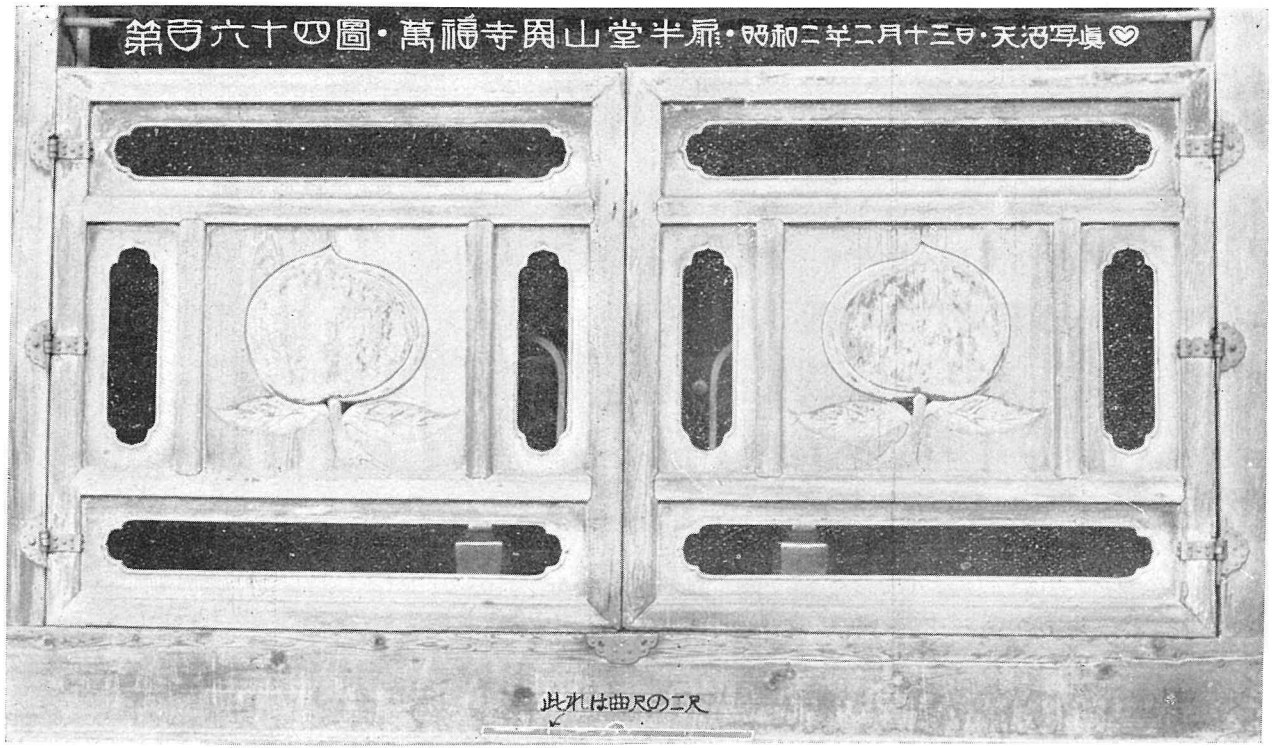
第百六十六圖は桃や牡丹の代りに縱横に二本づゝの格子が入れてある、さうして框や棧も割合に細いから、この種の扉のうちで一番きやしやに見える。涼しさうな扉である。

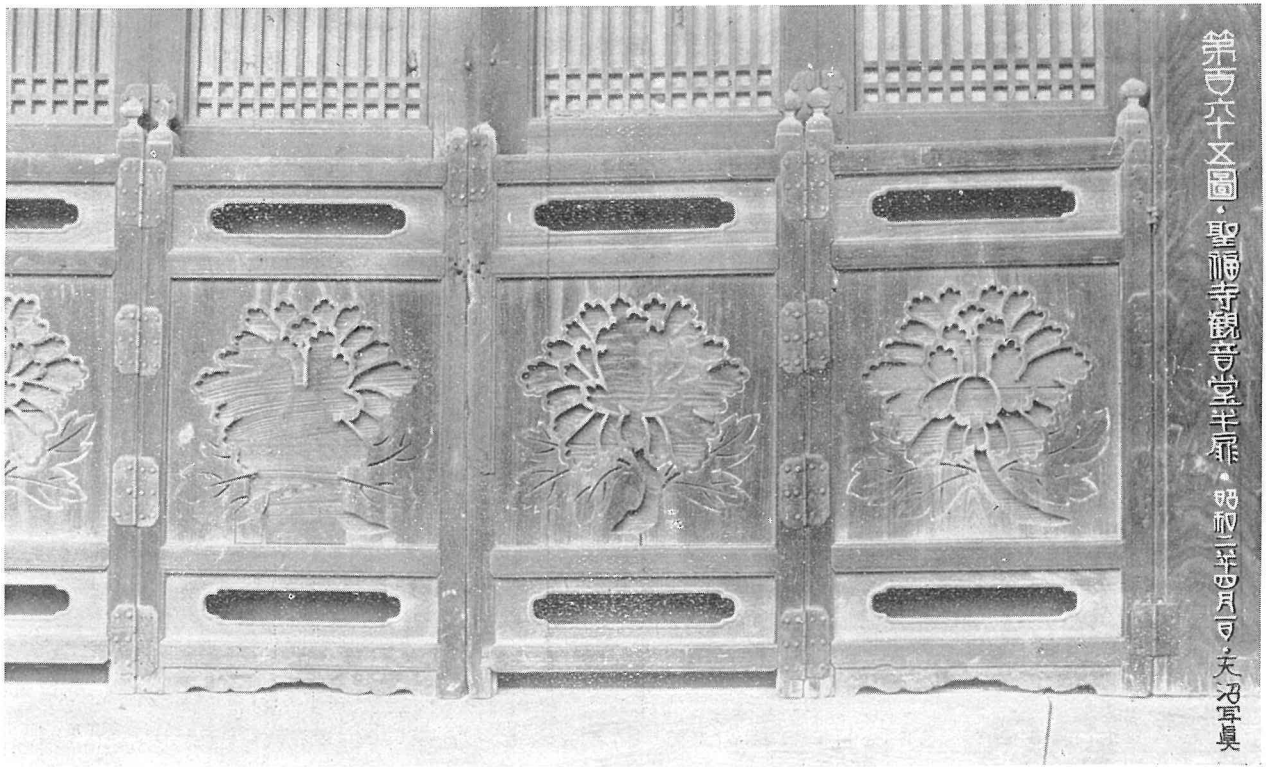
第二類　實例。

第百六十七圖のは、他の例の樣に蝶番で吊らず、軸が藁座に入つてゐる珍らしい例である。先にあげた鐵眼寺にも同樣のがあるが、先づこの位であらう。扉は上の廣間に九本の連子、下の廣間には格狹間の變形の樣なものが入れてある。この變形の格狹間の中には、縱の盲連子を細かに刻んであるが、其輪廓から內方に向つてでゝゐる上下左右の茨の先端に、西洋裝飾によく用ひらるゝ「立花」(Fleur-de-lis) によく似た花形が刻んである。この種の扉としては、全體としては中々いいできである。

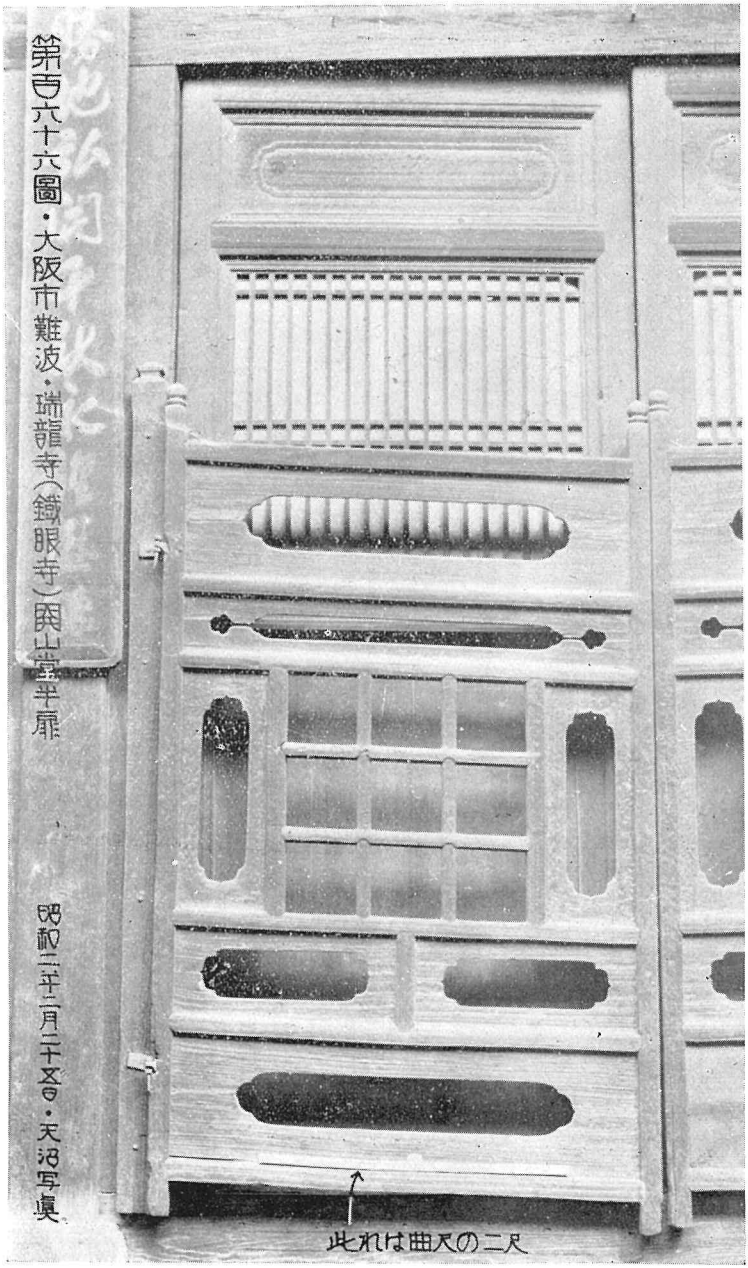
第百六十八圖は上に五本の連子、下に長方形の四隅を少しく內方に尖らせものが透彫にしてある。模樣職はこの形を「モッコウ」といつてゐるさうだが、ほんとうの木瓜とは違ふ樣である。これは寧ろ變形格狹間とした方がいゝらしいが、木瓜でもいゝと見える。其上中下の平たい間には、同じく平たい木瓜の中に卍繋ぎの樣な模樣が薄肉にほつてつけてある。これは「サヤガタクヅシ」(紗綾形崩し。模樣職は「サイガタクヅシ」といつてゐるさうだが、「イ」は勿論「ヤ」の轉訛であらう。) といふ名で呼ばれてゐるやうである。

第百六十九圖は興福寺媽姐堂 (Maso-dō) のである。他のと殆ど變りはないが、花模樣の入つてゐる廣間は、扉の中央になくて一方によせてある。兩折兩開であるため、左の二枚と右の二枚とが同じ形にしてあるところは、相當に考へてやつてゐる。これは何の花か私は知らない。ことによつたら支那の花かも知れぬ。此の扉の意匠と同樣なのが崇福寺護法堂中央の出入口にある、但したゞ兩


第百六十四圖・萬福寺開山堂半扉・昭和二年二月十三日・天沼写眞
此れは曲尺の二尺

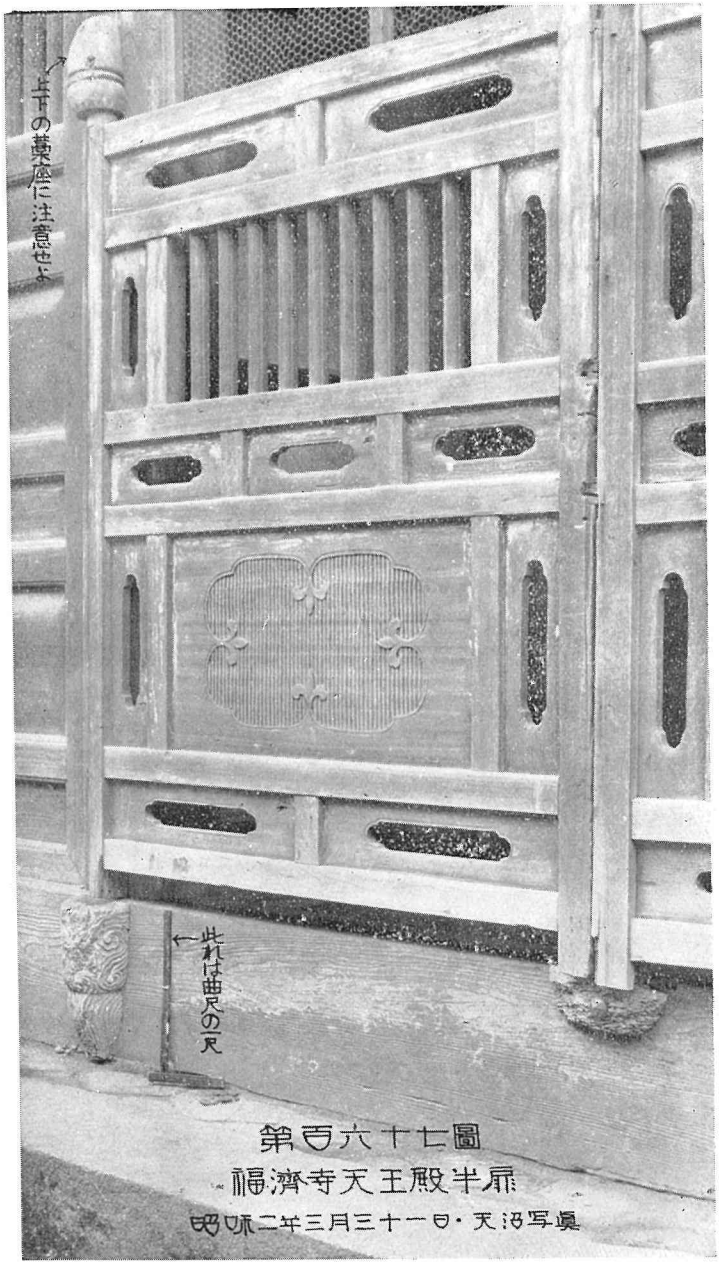


第百六十五圖　聖福寺觀音堂主扉　昭和二年四月廿一日　大沼寫眞

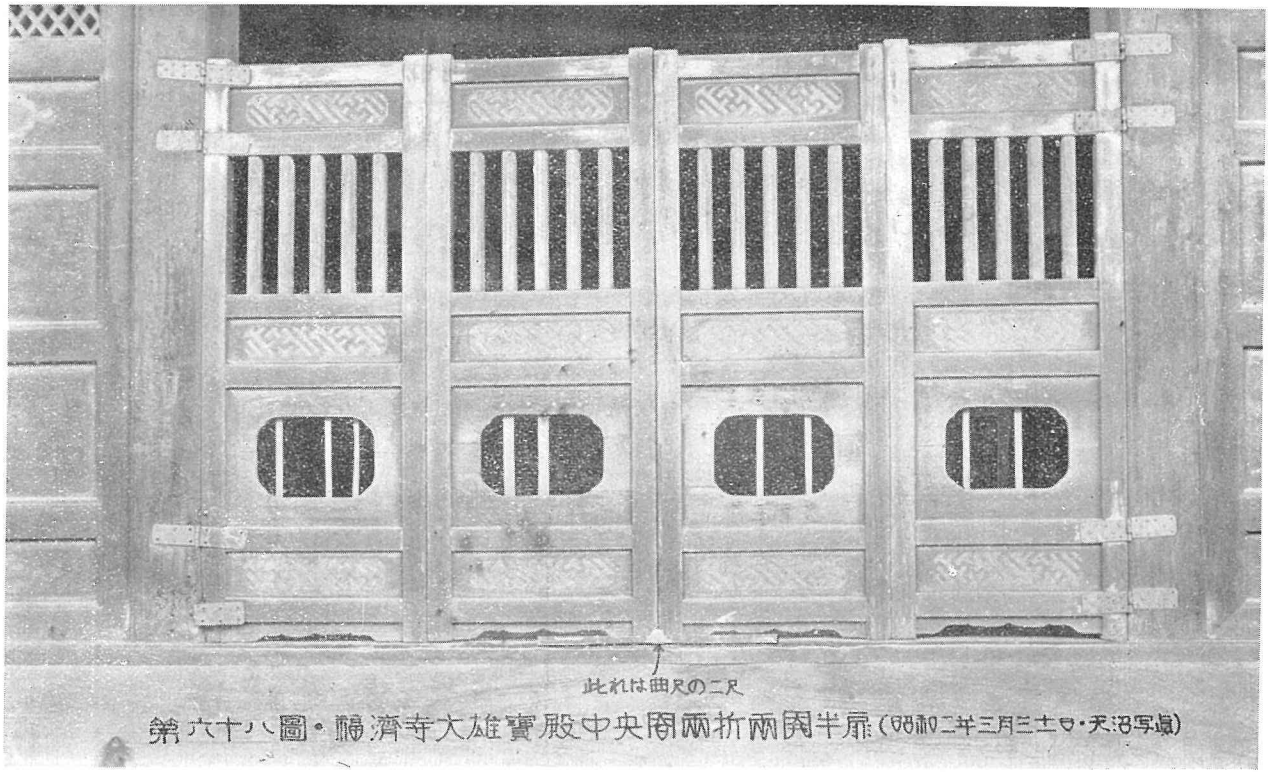


第百六十六圖・大阪市難波・瑞龍寺（鐵眼寺）興山堂平扉

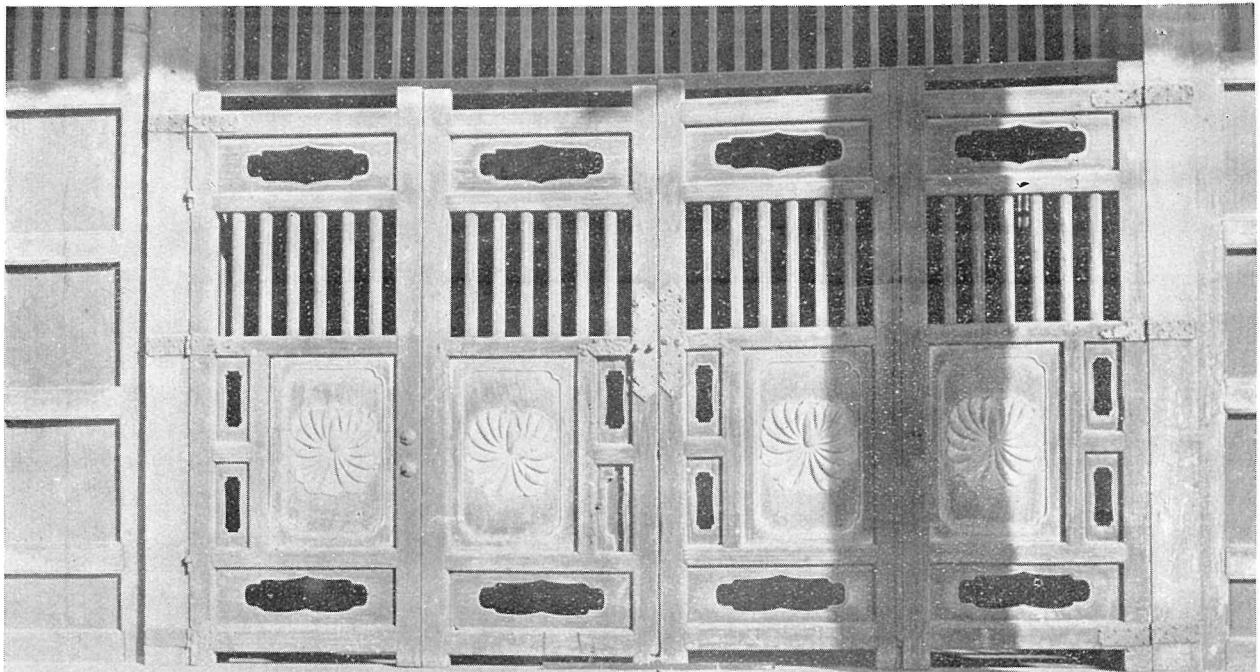
昭和二年二月二十五日・天沼写真



第百六十七圖
扉半殿王天寺濟福
眞寫沼天・日一十三月三年二昭和

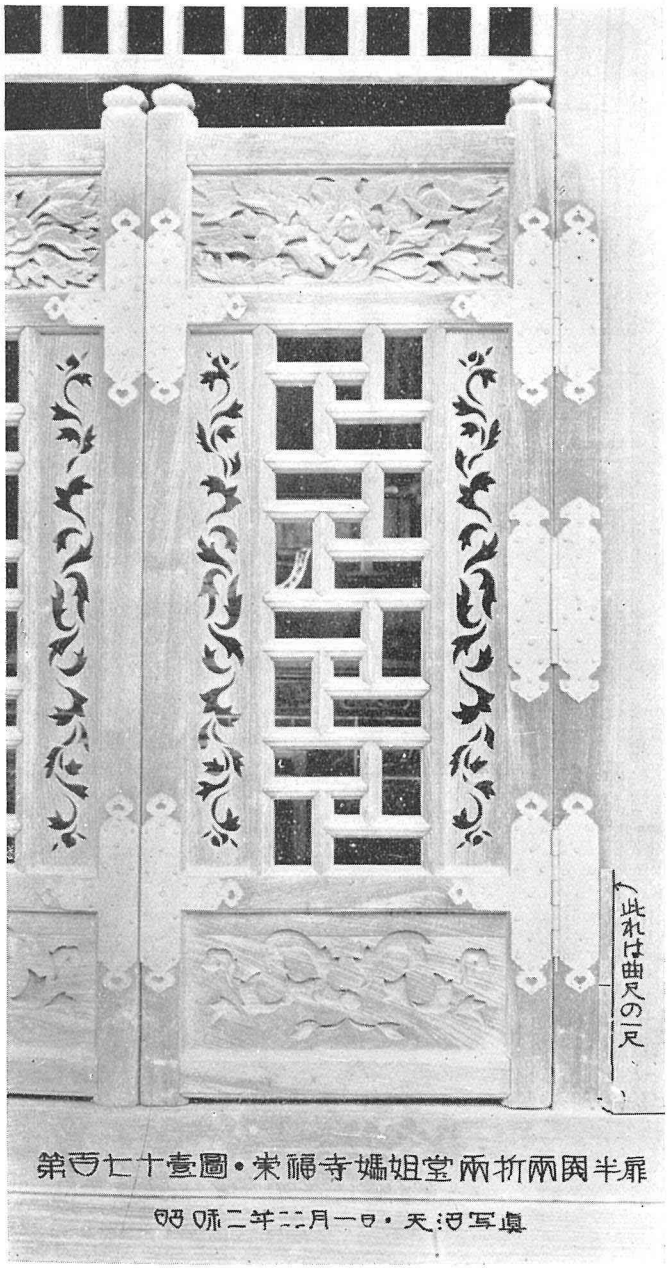


第六十八圖・觸濟寺大雄寶殿中央間兩折兩間半扉（昭和二年三月三十日・天沼写眞）



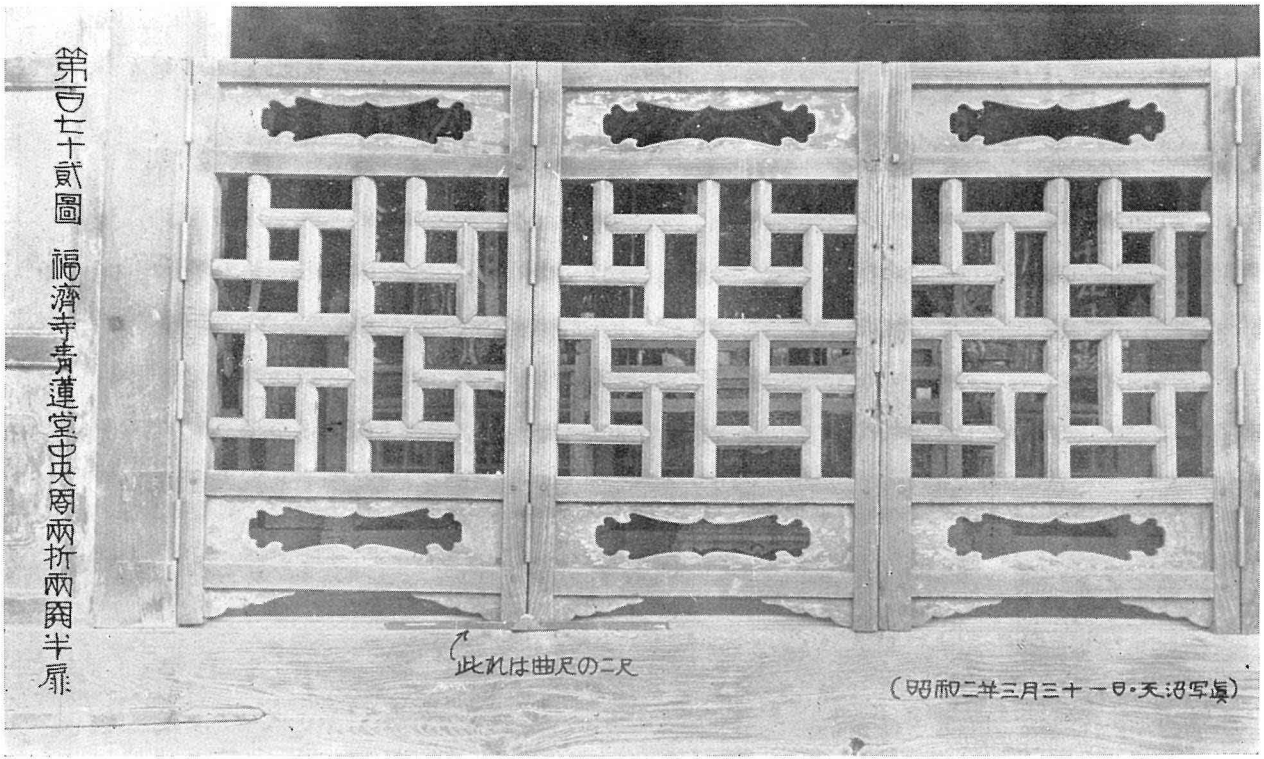
第百六十九圖・興禪寺媽姐堂中央間兩折兩開半扉（昭和二年二月廿二日寫眞）

第百七十圖　福濟寺青蓮堂兩脇間半扉

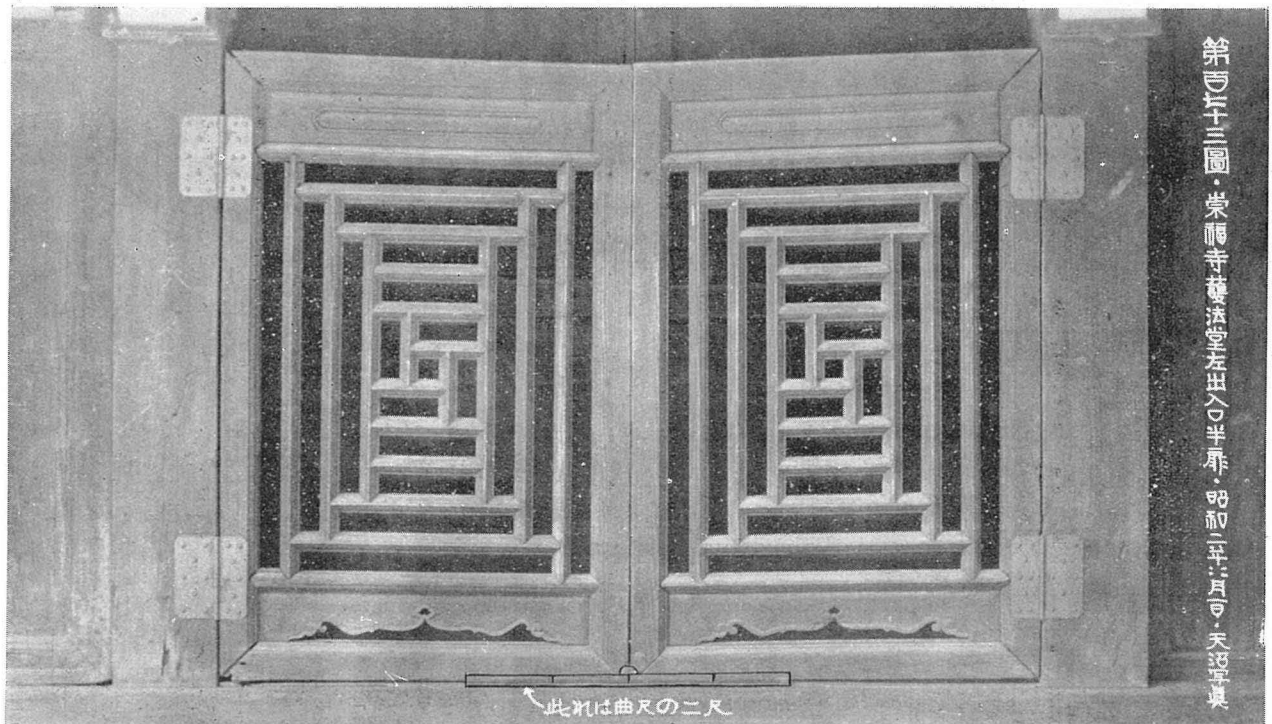


扉半開兩折兩堂姐媽寺福米・圖壹十七百第

眞寫田天・日一月二年二昭和



第百七十貳圖　福濟寺青蓮堂中央間兩折兩開半扉



第百七十三圖・崇福寺樓法堂左出入口半扉・昭和二年二月写・天沼写真

第四十二圖　東大寺開山堂内陣平面図

開であつて兩折ではない。

第百七十圖は青蓮堂正面兩脇の間ので、中央（第一七究二圖）と其次の左右の間のは、同じ高さで意匠も同樣であるが、兩隅の間はせいも高く、圖の如く連子と卍崩しの組合せである。今は色彩も大分剝落してゐるし、充分取調べる時間もなかつたので、間違つてゐるかも知れぬが、框・棧・連子等は黑、入子板は朱、格狹間及紗綾形の引込んだ所は金、格狹內及紗綾形は綠青、連子の上の巾の狹い平たい部分は金であつたらしい。できたてには大分美事であつたらうと思はれる。

第三類　實　例。

第百七十一圖は上下に四つの卍崩し連續文樣が主である。これは極く新しい樣な氣もするが、其割に中々よくできてゐる。實物よりは寫眞の方が確かによろしい。上の間の牝丹も下の間の模樣も、左右の細長い間の透彫も、何れもよろしい。

素色。

第百七十二圖は青蓮堂正面中央の間ので、兩折兩開になつてゐる（其次の左右の間のは、この通りで兩開左右端のは第三七〇圖に掲げてある。）。この扉は中央の大廣間を十字形に四等分して四つの正方形をつくり、其各の分劃の中に卍崩を入れたもので、これも亦實質よりは空間の多い涼しさうな夏向きの扉である。

第百七十三圖亦同意匠より成る、併しながらこの方は、長方形の廣間に巧に格子を縱橫に組み、中央に正方形の部分が殘る樣にし、この部に卍崩を入れたのである。さうして總ての空間の幅が同一になる樣に考案したところは、中々よくできたといつてよろしい、これは護法堂正面左端のもの。

第四類　實　例。

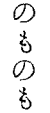
第百七十四圖が夫れで、これは前例と同じものであるが、たゞ中央の間を卍崩にしないで、縱に二本格子を入れたゞけである。これまで例にあげ

たものゝうち、特に格子が細いためと、縱横線のみからできてゐるせいか、一ばんきゃしゃに見える。この護法堂の扉は、さきに記した通り三所とも意匠が異なつてゐると同時に、其前にあるこの半扉また同樣に三所とも異つてゐる。三所の出入口に六種の扉が吊つてある堂は恐らくこれ丈けであらう。福濟寺青蓮堂すら五所に六種である。

第五類は別段圖を掲げる程でもなし、また解說をかゝなくてもいゝ筈である。

以上記載の事實より、私がこゝに半扉と命名したものを簡單にまとめておく。

黃檗宗の建物には、全部又は一部の出入口の扉を內開とし、其前に外開の半扉を吊る。其樣式は棧唐戶の如く、框・棧及入子板より成つてゐるが、中央の大きな入子杉に花（聖福寺媽姐堂）・果實（常に桃・萬福寺・瑞龍寺・聖福寺大雄寶殿）・格狹間（聖福寺中門）・格子（瑞龍寺開山堂・崇福寺大雄寶殿）を入れ、又は卍崩（崇福寺媽姐堂・同護法堂・福濟寺青蓮堂）・格

子（崇福寺護法堂）を以て飾る。又主要の間は二あつて、上には縱連子、下には一種の格狹間——木瓜形——や卍崩を入れたもの（福濟寺天王殿・大雄寶殿・青蓮堂・興福寺媽姐堂等）などがある。一種の格狹間は、時には其內に細かき縱盲連子を入れ、且つ四邊の中央より「立花」類似の裝飾をだしたのがある（福濟寺天王殿）。最も簡單なのは金剛柵（萬福寺天王殿其他）類似のものもある。此れ等の半扉は、間の廣い時は兩折兩開、狹い時には自然兩開である。さうして殆んど常に簡單なる蝶番を以て吊るも、また時には幾分裝飾を施したのがある（崇福寺媽姐堂）蓮座を用ふる場合は最も珍らしく、且其蓮座は普通のものと全く異つた意匠からできてゐる（瑞龍寺大雄寶殿・福濟寺天王殿。何れも後出）。連子又は格子の斷面は一種特別で、 又は  形を普通とする。其他框・棧・入子板の斷面・其面に刻せる文樣等、細部何れも在來の樣式と多少異なつてゐる。扉には多くの揚合色彩を施

す。

といふことになる。これでは餘り簡單とはいへぬかも知れぬが、どうもこれ以上つめられない樣である。

＊　＊　＊　＊

以上四回に渡り、扉に就て一通り記したが、勿論脱漏もあらうし、除外例も澤山にあらう、併し大體は誤つてゐぬつもりである。

扨て果してこれで大體誤つてゐないとすると、曩に第十一卷第四號第百一頁上段に扉の分類をしたのは、少しくいけない、あれは

（イ）板唐戸
（ロ）桟唐戸
（ハ）花狹間戸
（ニ）半扉

としなければならぬ、其上同頁下段第十五・十六行の間に次の七行、

花狹間戸とは、扉の四方は框で、中に一面に花狹間を入れたものをいふので、類例は餘りないやうである。半扉は主として黄檗宗伽藍の諸堂に用ひらるゝもので、多く木をきり組んだ、可なり意匠をこらしたものである。半扉は大概外開で、其後ろには內開のほんとうの扉――桟唐戸――がある。

を挿入せねばならぬことになつた。

＊　＊　＊　＊

桟唐戸に於いて横の桟はすべて「中桟」（ナカザン）と呼ぶのであるが、「中竪桟」とまぎらはしいから、以上すべて「横桟」とかいておいた。第百三十三圖（前號第二四頁）右下の㋮には、中竪桟と中桟とかいたから、夫れをみれば判る筈であるが、これ丈けのことを特に斷つておく。

＊　＊　＊　＊

訂正增補

（一）、京都にあつた――尤も今でも形ばかりはあるが――方廣寺大佛殿は、正面十一間のうち中の七間が出入口で、そこにたてゝあつた板扉は、現今の東大寺大佛殿の夫れの如く「二枚兩開」（かういふ名稱があるかどうか知らぬが、扉が大きいから、たゞの兩開にすると軸が其重量にたえぬ、さりとて兩折には手先が下つて了ふから尙更できかぬるから、そこで右も左も二枚づゝとし、四枚の扉が夫れ夫れ別別の軸で開閉する樣に造つたものを假にかく命名をした。）で、其面には五列五行に直徑.6の四葉を打つてあり、各列の距離は眞々6.5づゝ、扉上下端より最初の列まで各々3.0、扉の總高さ32.0、其四隅に「散八双」（チラシハツサウ、出後）を打つた隨分大きな扉であつた。

又其大さはまるで比較にならぬが、京都祇園の八阪神社本殿の扉も同じく四葉を以て裝飾してある。其他まだ探したらばでゝ來やうが、今のところは氣がつかぬ。

以上の三種（方廣寺及東大寺大佛殿・八阪神社本殿）、桃山江戸時代の、門扉にあらざる四葉を以て飾つた板扉の例にあげておく。

（二）、長崎市所在「唐寺」の隨一、崇福寺大雄寶殿正面兩脇の間の扉は、兩折兩開にすれば丁度いゝ樣なところを片方丈けに開く樣にしてある。手先が重いから少しく工合がよくない樣であるが、氣をつけて開閉すればさう大して不都合でもないやうである。片方に二つに折れて片方に丈け開くから、「片折片開」といふ名をつけておいた。

大阪市の四天王寺に用明殿といふ建物がある。これは江戸時代に建てられたもので、元とは家康を祀つたのであるが、今は　用明天皇を祀り、名も用明殿とかへたのである。其拜殿正面中央の出入口には「三折兩開棧唐戸」を入れてある。先きにかいた「二枚兩開」と同樣に、こんな名でいゝかどうか知らぬが、一枚が三つに折れるから、二つに折れたのを兩折といふのに對し、「三折」といふ名にしてみたのである。第十一卷第四號第百

三頁上段にかいた開き方による分類は、

（イ）　片開

（ロ）　兩開

（ハ）　二枚兩開……東大寺大佛殿の例

（ニ）　片折片開……崇福寺大雄寶殿の例

（ホ）　兩折兩開

（ヘ）　三折兩開……四天王寺用明殿の例

從てこゝには、（ハ）・（ニ）・（ヘ）の説明をしておくのであるが、（ハ）は既に（一）に記したから略す。

（二）は恰も「兩折兩開」を半分にした樣なもので、普通まん中から半分が一度開いてまた開くのを、さうしないである一間の扉がまん中から二つに折れ、更に夫れが一方へ開く樣にしたもので、稀に用ひられた樣である（同頁上段第七行と第八行とのあいだにこれ丈けいれる）。（夫れから上段から下段へかけて兩折兩開の説明があつて、次に同頁下段第四行目と第五行目との間に次の）。

（ホ）は「ミツオリレウビラキ」と訓むつもりであるが、これは天王寺の用明殿の例によると、『初めに外方に開き、次に內方に開き、第三度目に再び外方に開く』ことになつてゐる。用明殿以外にかゝる扉の有無を知らぬから、開き方も亦自然この反對になつたのがあるか否かも知らぬ（の六行を挿入する）

（三）、同じく第十一卷第四號第百――百一頁にかけ扉を吊る時には「肱壺は殆ど用ひぬ」と記したが、例へは第百三十八圖㋜に掲げた醍醐寺三寶院唐門扉、京都市高臺寺門扉を初め、新しい寺の夫れには、肱壺を用ひたのが可なりある。もつと古いのにあるかも知れぬが、今のところ桃山より古いのは氣がつかぬ。だからあれを『肱壺は桃山以降間々門扉に用ひられた』と訂正をしておく。

＊　＊　＊　＊

（四）、最後に少し古いが瓦のところに、少しばかり書き加へておき度いことがある。

第十一卷第三號第百三十二頁に掲げた第百十一圖のうち、下左より二つ目㋥に、大阪府北河內郡

山田村百濟神社三重塔址出土の、裏面に菱形文様なる平瓦の破片をかいておいたが、あの瓦は實はさる知人がもつてゐたので、其摺本を作つたさき所をきいたときの答をそのまゝ、別に不審も起さずかいたのであつたが、去る三月十三日好機を得て、石崎達二氏と共に實地踏査をしたら、塔址と思はるゝところは二つで、左の様な關係をもつてゐた。

塔址は東西にあつて相距ること眞々146.5、東塔方約18.5、西塔方約17.8。三重塔なら隨分大きな方で、五重であつたとしても差支はないのである。其址に殘存せる礎の數及び大體の大さを測定したら、次の様な寸尺であつた。

東塔址。擦礎1、圓形繰出徑3.35、高0.3
四天柱礎2、側柱礎7、圓形繰出徑2.4
高0.3

西塔址。四天柱礎1、側柱礎3

其他何れも亡失してゐるが、此れ等の礎は何れも圓形の繰出を有し、更に中心に小圓形の突出部卽ち枘がつくり出してあること、山城國分寺の夫れの様である。礎相互の距離間隔を測定してみた結果を記してみると、

東塔。中の間7.1、脇の間5.75づゝ
西塔。中の間6.7、脇の間5.5づゝ

卽ち西塔の方が幾分小さい様である。其他礎が神社境内所々に一つとか二つとか三つとかばら〳〵にあるが、其相互の關係を調査することは、此の日の様な豪雨中では不可能なので、更に他日を期したが、要するに殘礎や出土の瓦から考察してみると、奈良時代にできた寺で、大凡室町時代頃まで續てゐたと考へても、大して不都合でもないらしいのである。

曩に實地をみずにたゞ三重塔址とかいたのは、少しく不要意であつたから、この機會に幾分詳細に述べ、補遺を兼ねて訂正をしておく事にしたのである。この寺址に就ての詳細は他日石崎氏が發表される筈である。豪雨中寺址測定の際、大に盡力せられたる諸氏に對し、感謝の意を表して筆を擱く。（昭和二年五月三十一日稿了・火曜・晴）